

special
1

人を育て、人とともに、 地域医療の明日を創る。

第3弾 —— きめ細かな地域支援・教育 ——

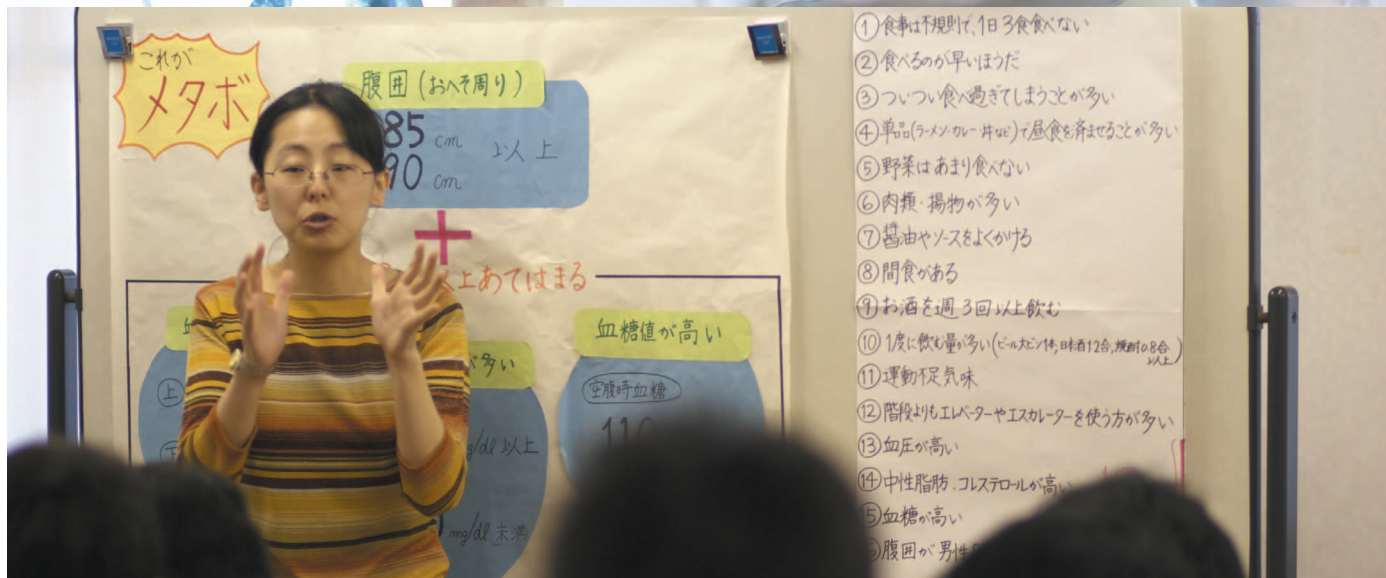
special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。



「つばさ」

貴誌は第7回BHI賞において
最も優秀であったことを認め
BHIマークを贈ります
NPO法人日本BHI研究センター



Tsubasa

special
1



Pegasus

人を育て、人とともに、 地域医療の明日を創る。

第3弾 — きめ細かな地域支援・教育 —

地域完結型医療のなかで、良質な医療を継続して提供していくためには、地域の医療・介護に関わる人々が連携していかなくてはなりません。

その一方で、患者さまを含めた地域の方々に、変わりゆく医療制度や疾病予防に関してわかりやすく情報提供し、健康増進に貢献することも求められます。

こうした活動について、医療法人ペガサスでは、馬場記念病院が地域医療支援病院の承認を得る以前から、必要性を感じて積極的に取り組んできました。

地域での支援や教育活動において大切なことは、「継続した仕組みづくり」にあります。一過性の学びではなく、知識や体験を持続して積み重ねることにより、地域医療・介護の質的向上を図ることが大きな目的です。

へ人を育て、人とともに、地域医療の明日を創る〜シリーズ第3弾は、こうした医療法人ペガサスの地域での支援・教育活動を取り上げてご報告します。

「地域の医療・介護従事者を支援する取り組み」

バトンの切れ目なく、継続的に 医療・介護サービスを提供していくために。

地域で医療や介護に携わる人たちを対象に、医療法人ペガサスでは早い時期から熱心に支援活動を展開している。その取り組みに並々ならぬ情熱を注いできた一人が、法人本部企画運営局の局長・田中恭子（馬場記念病院事務部長）である。田中の地域医療に寄せる思いをひも解きながら、医療法人ペガサスの取り組みを追ってみたい。

病院の専門機能を “デリバリー”していく 試み。

話は、およそ9年前にさかのぼる。馬場記念病院は平成10年11月、開放型病院の認可を受けた。開放型病院とは病院の設備や機能を地域の医師に開放し、共同利用していただく病院のことをいう。その認可を受けてしばらくしたある日、馬場記念病院事務部長・田中恭子は、リハビリテーション部のスタッフたちとミーティングしていた。田中はざっくりばらんにこう切り出した。「うちは開放型病院になったわけだし、病院の機能をもっと診療所の先生方に使っていただきたいですね。例えば、療法

士の皆さんが診療所に向いて、患者さまにアドバイスしたりすることはできないでしょうか」。田中がこんな提案をぶつけたのには理由がある。田中は事務部長になる前、理学療法士としてリハビリテーション部の部長を務め、超急性期から回復期、慢性期、在宅まで続くペガサスのリハビリテーション医療の連続した仕組みを作り上げてきた人物なのである。退院後のリハビリテーション医療の重要性を知り尽くしているからこそ、馬場記念病院の専門ノウハウをもっと地域へ開放していく必要性を強く感じていた。

施設・設備だけではなく、 人材もフルに ご活用いただく。

の熱い思いは、スタッフたちの心を大きく動かした。こうして始まった活動は、平成12年に開設されたペガサス訪問リハビリテーションセンターへと受け継がれていくわけだが、馬場記念病院のリハビリテーション部においても一部、活動が継続されている。「うちのスタッフができる、簡単なリハビリテーションを教えてほしい」という依頼に応え、診療所の職員教育の一環として指導しているのである。

このようなサービスは、栄養部でも行われている。多いときで月に20件

ペガサスの医療・介護支援活動

症例検討・CPCプロジェクト

日進月歩で進む医療の今を学ぶために、2005年4月から馬場記念病院で活動を開始した「症例検討・CPCプロジェクト」。CPCとは、臨床病理カンファレンスの意味である。実際の活動は、基本的に毎月第4水曜日に開催し、難しい症例や珍しい症例について、担当した医師と病理医が報告し、参加した各診療科の医師や技師たちと意見交換をしたり、また、医師の特別な活動があった際は、その報告会なども行う。テーマによっては院内のみの勉強会になることもあるが、それ以外は診療所の先生方にも気軽に参加いただけるようご案内している。



ほどの依頼に応え、管理栄養士らが診療所に赴き、患者さまに生活のアドバイスを行っている。利用される診療所からは、「栄養指導をお願いしてから、患者さまの症状が改善し、薬の量も減った」といったうれしい評価をいただいている。

これらの活動の狙いはどこにあるのか。当時を振り返り、「地域医療支援病院になる前から、施設や設備だけでなく、当院の人材も存分に使っていたのだと思います。」

そうすることが、地域医療全体のレベルアップにつながると考えていましたから」と田中の答えは明快だ。

その言葉通り、現在では、院内で開催する「症例検討・CPC」を診療所の先生方にオープンしたり、また、「セラピストのための医療情勢の勉強会」といった研修などが行われている。

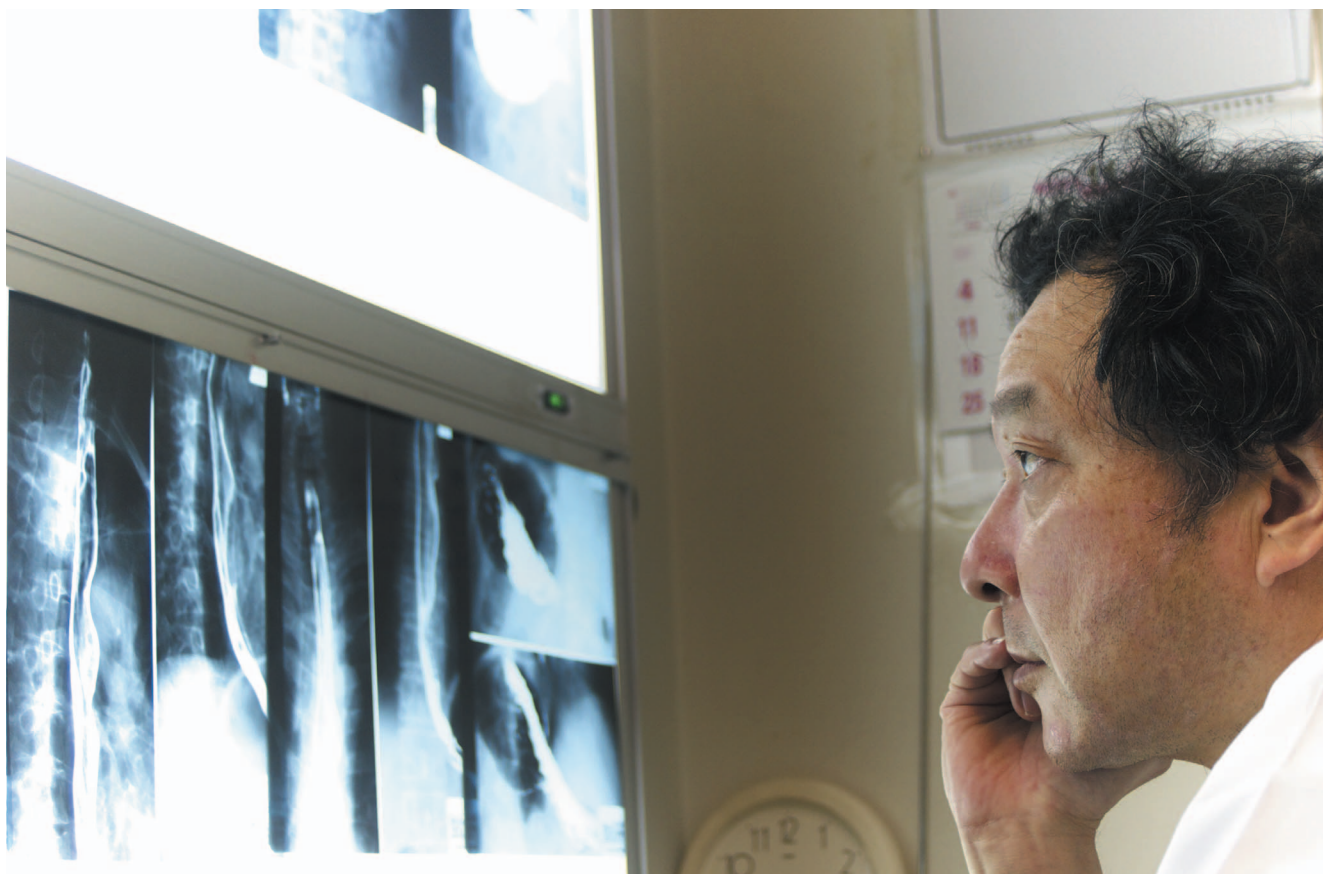
さらに、医師の専門技術の提供にも、馬場記念病院のサポートは広がる。例えば放射線科では、診療所から紹介された患者さまの検査以外にも、診療所の先生方からの読影依頼に対応。放射線科の部長・山田哲也医師が、診療所で撮影されたX線フィルムを読影を行っている。「一般的には、放射線科の医師は非常勤であることが多く、常勤医師を配置するのはなかなか難しいんです。当院でも、'95年4月から常勤放射線医師が欠員



していましたが、'04年1月に山田先生が常勤医師として入職してくださり、貴重な人材を得ることができました。ですから、就任まもなく診療所の先生方にも積極的に広報しました。画像診断専門医の技術をどうぞご活用ください。幸い、山田先生はお忙しいときでも手間を惜しまず、協力してくださいます。高度な画像診断技術を皆で共有することにより、地域全体の医療の質が上がる、ということをよく理解されているからでしょう」と田中は語る。

豊富な経験が 正確な読影を支える。

山田医師の話を聞くために、放射線科の読影室を訪ねた。山田医師はただ黙々と、袋から取り出したX線フィルムをシャーカステンに掛けては、臓器のすみずみまで目を走らせ、所見を書き込むという仕事を続けていた。



読影のコツはどんなところにあるのか。山田医師に尋ねると、「正常な状態の写真を数多く見ることですね」という答えが返ってきた。「正常なX線フィルムを見慣れているからこそ、正常な構造物以外のものが映っているとき、何か変だと気が付く」というのだ。もう一つ、読影のコツとして、山田医師は「診療所から紹介された患者さまの検査の場合、先生の紹介状をよく読むこと」というポイントをあげる。「患者さまの病歴や検査目的などをしっかりと把握しないと、着眼点がずれてしまいますから」というのが、その理由だ。さまざまな疾患の可能性から疑わしい病名の優先順位をつけるとき、紹介状の情報は欠かせない手がかりになる。

診療所の先生との ディスカッション。

こうして山田医師がいてねいに書き込んだ所見は、X線フィルムとともに速やかに診療所の先生に届けられる。ただし、緊急を要する場合は山田医師が直接、診療所の先生に電話をかけ、「早急に治療が必要な疾患が疑われる」ことを告げる。その対応は誠実かつスピーディーで、山田医師の手腕を頼りにされる先生方も多

ペガサスの医療・介護支援活動

脳卒中地域連携パス協議会

脳卒中地域連携パスとは、脳卒中の患者さまが急性期、あるいは回復期の病院を退院後も、切れ目のない医療を受けられるように作成された診療計画書である。そのパスを中心とした地域連携ネットワークを構築するために、2007年7月、脳卒中地域連携パス協議会が結成された。この協議会は、地域の診療所、療養型病院などさまざまな方にご参加いただき、脳卒中地域連携パスの運用を進めながらパスの改良に努めるとともに、地域の医療機関との円滑な連携を行うため、できるだけたくさんの協議会開催をめざしている。

い。それが、診療所で撮影されたX線フィルムを預かり、読影することにつながっているのだ。「難しい画像に出合ったとき、これで本当に見落としてはないか、と疑心暗鬼になることは当然あると思います。医師が患者さまに“大丈夫ですよ”というのは、勇気のいることですからね」と山田医師は言う。

診療所の先生のなかには、診療所で撮影したX線フィルムを手にも、わざわざ馬場記念病院まで足を運ぶ方もおられる。X線フィルムを見なが

地域医療支援室

地域医療をコーディネートする部署。スタッフ構成は室長1名、専任メンバー4名、兼任メンバー4名の計9名。地域完結型医療ネットワークづくりをめざし、地域の診療所、介護保険関連の事業所との連携強化に努めている。診療所に対しては、＜先生のお役に立ちます！宣言＞というスローガンを掲げ、診療材料・医療機器の共同購入、各種ご相談、職員教育といったサービスも展開している。

ら、ディスカッションするためだ。山田医師が画像を詳しく見て判断し、診療所の医師は患者さまの状態や他の検査結果をもとにして意見を述べる。かかりつけ医と画像診断医というふたりの専門性をもとに、多角的に診断し、より正確な答えを出すのである。こうした日々の業務の傍ら、山田医師は診療所の先生を対象にした講演などにも意欲的に取り組んでいる。「MRIやCTなどの検査機器は年々高度化し、それを読み取る技術もあり専門性を増しています。そういう

高度な画像診断技術を診療所の先生方に伝え、少しでもお役に立ちたいと考えています」と、山田医師は語る。

診療所の先生方の 要望に応えるために。

山田医師と診療所の先生の信頼の絆を支えているのが、地域医療支援室である。診療所からの依頼を山田医師に届けたり、また、検査を目的とした紹介患者さまの場合は、実際に撮影を行う臨床放射線部へ伝えたり、スケジュールを調整する。そして、山田医師の所見を携え、診療所へ足を運ぶ。それら一連の仕事を地域医療支援室のスタッフたちが担い、病診連携の絆を強めるために力を注いでいる。

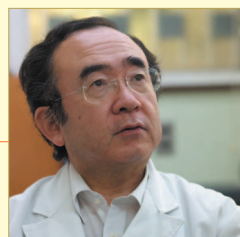
主任の上野将司は「当たり前かもしれませんが、一番大事なのは要望



診療所の先生から

読影で少しでも疑問があれば、
山田先生に相談しています。

とのぎ内科クリニック
院長 井上 良一先生



2年ほど前から、馬場記念病院の放射線科へX線フィルムを直接持っていき、山田先生に画像診断をお願いしています。診断結果をレポートでいただくことは一つの方法ですが、直接、X線フィルムを見ながら、山田先生と話し、見るポイントを教えていただくことで画像を見る目が養われます。それと、疑問に思ったことをその場で聞けるので勉強になりますね。

胸部X線写真の読影で難しいところは、肺と心臓が重なっている部分です。そういう場所は病巣を見落としやすく、逆に病巣がないのに

病巣があるように見えたりすることもあります。やはり、少しでも疑問に思った場合は、山田先生のような放射線科の専門医に見てもらおうと確実ですね。実際、今までに山田先生に肺ガンや肺結核などを見つけていただいたこともあり、本当に感謝しています。



必要性を感じるたびに 勉強会が増えてきた。

に一つひとつ応えていくこと。ご依頼に対する返事でも、紹介してくださった患者さまの治療報告書にしても、早く正確に返すことに努めています」と話す。地域医療支援室では、診療所の先生方の要望があれば、予約患者さまの診察や検査時の診療所と病院間の送迎も行っている。「車椅子の方もリフト付きの車で病院までお送りでき、好評をいただいています」と上野は言う。

診療所の先生を支援する活動は、勉強会の継続的な展開にも広がっている。その一つに、診療所の先生を招いて、年に3〜4回行われる「馬場記念病院勉強会」がある。診療所から紹介を受けた患者さまの症例をは

ペガサスの医療・介護支援活動

日米ジョイントフォーラム

医療のご意見番としても知られる、社会医療研究所所長 岡田玲一郎先生の企画により、開催している講演会。毎回、医療先進国であるアメリカから医療の専門家を講師に招聘。一歩先を歩んでいるアメリカの医療最前線を学び、日本での医療システムや質の向上について考えを深めている。その大阪事務局的な役割を担っているのが、医療法人ペガサス。第3回日米ジョイントフォーラムは2007年12月2日、「医療の質」をテーマに開催され、多くの参加者でにぎわいを見せた。

はじめ、初期診療の現場で参考になる症例を馬場記念病院の医師が報告し、ディスカッションを重ねる。その意義は、馬場記念病院の医療の中味を伝え、病診連携を深めるためだ。馬場記念病院勉強会が始まった経緯について、田中に聞いてみた。「最初は内科勉強会として、診療所の先生方と内科の医師たちが主体的に始めた勉強会

だったんです。これはいい試みだということで、当時の医師たちが全診療科を対象を広げました」。

その後、馬場記念病院では医療だけでなく、介護の勉強会もスタートさせる。「介護保険制度がスタートし、病診連携だけでなく、病院と介護サービス事業者との連携も必要になったんです。そこで、当院と連携してくださっている診療所で、日頃からお世話になっている白鳥内科の白鳥俊治院長とペガサス訪問看護ステーション統括所長の寺下久代が協力し、『地域医療介護研修会——気づきから築きへ』を立ち上げました」と田中。最近、行われた研修会では「デイケア・デイサービス」をテーマに話し合わせ、サービス事業所の横のつながりが薄いことから、「デイケア・デイサービス連絡協議会をつくろう」という話に発展した。「法人内だけにとどまらず、地域全体の介護を良くしていこう、という私たちの思いが実り、少しでも貢献できたことをうれしく感じています」と田中は表情を緩める。

次々に誕生し、展開される医療従事者への支援活動。「誰かの指示を

受けたのではなく、今私たちが必要に感じることを職員それぞれがカタチにしてきた感じですね」と田中はさりとと言う。その根底には、「上質な医療・介護をバトンの切れ目なく継続的に患者さまに提供していきたい」という医療法人ペガサスの強い思いがある。特に介護の分野では、法人で提供できるサービスはほんの一部にすぎない。従って、他の介護施設と積極的に連携し、情報を共有し、地域全体の質の底上げを図ろうとしている。「入院された患者さまは当然、地域に帰っていかれます。地域は広く、そこで展開されている医療・介護サービスも多岐にわたります。ですから、私たち法人内だけで勉強しても意味がないんです。地域全体でレベルアップすることを考えなくては」と田中は言葉に力を込める。



ペガサスの医療・介護支援活動

地域医療介護研修会——気づきから築きへ

「地域医療介護研修会——気づきから築きへ」は、医療法人だからこそできる情報提供を行い、介護・在宅看護に関わる診療所や事業所との連携を図るための研修会。介護保険が始まった2000年にスタートした。毎回、医療法人ペガサスの職員と他法人の職員が集まってテーマを企画。事業所の垣根を超えて横のつながりを強め、地域の患者さまにより良いサービスを継続して提供できるよう、現場の課題を話し合っている。

「地域の方々や患者さまに」必要な情報“を提供する取り組み”

医療のこと、健康のこと、介護のこと。
地域の方々や患者さまにもっと知っていただくために。

地域医療全体の質的向上を考えると、地域の方々に医療や健康への意識を持っていたり、それとして変わりゆく医療や介護の制度について理解していただくことがとても重要になる。

そのため、医療法人ペガサス全体で「ペガサス医療体験デイ」や「ペガサスセミナー」といったさまざまな取り組みを行っている。そうした地域の方々への情報発信・啓発活動について紹介しよう。

もっと参加し、体験して
もらえる仕組みづくりを。

好天に恵まれた平成19年秋の日曜日、年に1度の「ペガサス医療体験デイ」が開催された。馬場記念病院前駐車場には医療相談窓口や介護相談窓口、模擬店などのテントが並び、馬場記念病院とペガサスクリニック、ペガサスリハビリテーション病棟の各所では見学・体験できる催しがいろいろ企画されていた。来てくださった地域の人々を迎えるのは、130名の職員ボランティアたち。そのなかに、スタッフたちに声をかけながら、イベント

の様子を見て回る田中恭子の姿もあった。いつもは隙のないスーツ姿の田中も、この日はラフな装いに身を包み軽快な足取りで歩いていた。

ペガサス医療体験デイは11回目を迎えるイベントである。田中はその初回のテーマ作りに携わった一人だ。「ペガサス医療体験デイは11年前へ来て、見て、知って、これからのペガサス」というテーマで始まりました。それは、法人の医療理念『ペガサスの約束』にあるように、『どこから見ても、誰にでも、よくわかる病院』でありたいという考えから生まれたものです」と語る。

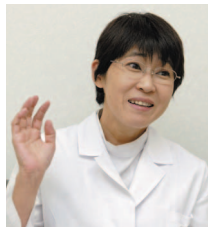
その後、実際の運営は広報委員会のイベント担当グループに任してきたが、前回のペガサス医療体

広報委員会

医療法人ペガサスの広報委員は法人各施設からの総勢35名。「ホームページ」「ポスターなどの掲示物」「医療体験デイ」「広報誌の編集」をそれぞれ担当する4グループに分かれて活動している。医療法人ペガサスの取り組みや医療・介護制度などについて、患者さまとご家族を含めた地域の方々や医療に関わる方々に情報提供するのが、広報委員会の役目。よりの確でスピーディな情報提供をめざしている。



験デイでは、「少し口を出して、軌道修正してもらいました」と田中は笑いながら話す。このイベントが始まって10年。ややもすると、お祭りの催し物中心の内容に偏る傾向が見られたからだ。「ペガサス医療体験デイは、病院祭りではありません。地域の方々と一緒に変わっていくのが目的。だから、〈体験デイ〉の名前通り、もっと参加・体験してもらおう仕組みを考えていきたいと思います」と、田中は担当スタッフたちに説いた。「原点に帰ろう」——そんな田中のリードもあり、昨年から院内の見学や体験に重点を置くように軌道修正した。この経緯について、広報委員会の責任者である魚野弘子（馬場記念病院検査部・次長）は振り返る。「ペガサス医療体験デイはここ数年、『ひろげよう、地域医療の輪』というテーマで開催していますが、昨年から参加型イベントに力を入れるようになり、よりテーマ性を強めたよう



に感じています。今年はさらに『体験コースを充実させよう』と、みんなで企画を練りました。担当役を務めた馬場記念病院人事課の北谷慎也も、つけ加える。「今年はたくさんの方々が見学・体験してくださいました。参加された方から『役に立つ内容で良かったよ』という声をかけてもらい、うれしく思いましたね」。

生活習慣を改善する きっかけをつくる。

看護師体験、介護体験、食事形態の体験、放射線・検査見学、家庭でできるリハビリ体操といった多様なコースが用意された、平成19年のペガサス医療体験デー。その中から、「自分でできる生活習慣の改善コース」を振り返ってみよう。

会場に集まったお客さまには、「その習慣がメタボ?!」と題されたチェックシートが配られ、栄養部・管理栄養士の趙玉蓮（チョウ オンリョン）が前に立った。明るい口調で、メタボリック症候群を解説し、腹囲の測定実演や食べ物のカロリーあてクイズなどの司会進行を進めていく。皆が参加できる工夫が随所になされているせい

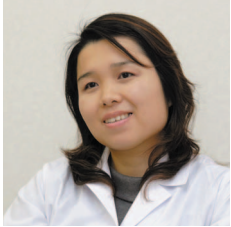


か、見ていて飽きることがない。会場は、しばしば笑いに包まれた。しめくりは、「脱メタボ！ヘルシーメニュー」の試食会。510キロカロリーとは思えないほどボリュームのある食事を、参加者はいしそうに試食していた。

栄養部のスタッフが 春先から準備を重ねて。

この体験コースを企画したのは、栄養部の面々だ。「春先からテーマを考え、長い時間をかけて、お腹の出した男性の等身大パネルや、首から下げる食品カードなどを手作りしていきましました。それから、献立を試作・検討したり、講演の予行演習をしたり……。準備はけっこう大変でしたが、楽しくて、ちょっとためになる内容になるよう、みんなで頑張りましました」と、栄養部主任・松井理恵は話す。

自分でできる生活習慣の改善。これは、今話題のメタボリックシンドロームに照準を合わせたものだ。しかし、このテーマを選んだ理



由は、話題性だけではない。「2008年4月から医療保険加入者への特定保健指導が始まります。それに備え、栄養士という存在や栄養指導のわかりやすさをアピールしたいという狙いもありました」と松井は言う。特定保健指導とは特定健康診断の結果に基づき、生活習慣の改善に役立つ運動や栄養のアドバイスをを行うもの。「楽しかった」「ためになった」という参加者の声に、松井は確かな手応えを感じ取ったようだ。

いざというときに備え、 心肺蘇生法とAEDを知る。

「いち、に、さん、し……」というかけ声に合わせて、心肺蘇生用の特殊な人形の胸部を押す心臓マッサージの疑似体験。体重をかけながら、30回押し続けるのは想像以上に体力を使う。体験者はうつすら汗ばんだ顔で「あゝ、しんど」「こんなに大変とは思わなかった」と声をあげた。これは、医療体験ディで行われた「心肺蘇生体験コース」のひとつコマである。

このコースは、心肺蘇生法を体験するとともに、AEDを知るためのもの。心肺蘇生法とは、心臓



が動いていない人に対して行う救命処置であり、AEDとは、心臓停止の状態になった心臓に電気ショックを与え、正常に戻すための医療機器である。企画に携わった広報委員イベント担当グループ・嘉陽田光子（北5階病棟 師長）はこう話す。

「突然倒れた人を見たとき、一般の人は、咄嗟にどうすればいい



のか困ると思います。また、最近、町中でAEDの普及が進んでいますが、これが何かわからない人も多いのではないのでしょうか。AEDを実際に心肺停止の人に使用するには、講習を受けることが奨励されていますが、心肺蘇生の一連の流れやAEDを知っていただくきっかけになればと企画しました」。

救命について学ぶ人が 増えることを願って。

嘉陽田とともに準備し、当日の進行を担ったのは、ペガサスの訪問看護ステーション所長たち。司会役を務めたペガサス訪問看護ステーション八田の所長・岩根ゆかりが最初に語りかけた。「町などで倒れている人を発見したら、まず声をかけ、意識と呼吸を確かめます。反応がなければ周囲の誰かに救急車の手配と、近くのAEDを持ってくるよう頼み、それからすぐに心臓マッサージを開始。AEDが届いたら速やかに使用するという流れになります」。この岩根の説明にそって、スタッフたちがデモンストレーションを行い、参加した人たちが全員に体験してもらった。

最初に始まったのは、 ペガサスセミナー。

平成19年のペガサス医療体験デイは、多くの来場者を迎え、たくさんの方々に「体験学習」の機会を提供した。締めくくりとして、ペガサスクリニック1階で、ペガサスリハビリテーション病院の藤永卓治院長による講演「前立腺ガンは恐くない？」が開催され、すべてのプログラムを無事に終了した。

このような地域の方々や患者さまへの、情報発信や啓発活動はいつから始まったのか。「発端は、ペガサス医療体験デイよりも古く、平成8年からスタートしたペガサスセミナーですね。最初は『ペガ



サス在宅セミナー』と呼んでおり、理学療法士などのスタッフが中心となって、退院される患者さまとご家族に、在宅療養での注意点をアドバイスしていました。その後テーマを広げ、『ペガサスセミナー』と名称も変更し、今日までずっと続けているんです」と田中は説明する。現在は毎月一回、馬場記念病院内の医師やコメディカルスタッフ、診療所の先生方などを講師として、開催。「例えば『胃ろうの造設と管理』をテーマにしたセミナーでは、一般の方々だけでなく、地域の療養型病院の方も足を運んでくださるなど、参加者も広がりを見せています」と田中は言う。

乳ガン検診をもっと 多くの人に受けてほしい。

最近、行われたセミナーの中から、一例を紹介しよう。この日のテーマは「乳ガン検診を受けましょう」。講師は臨床放射線部次長で放射線技師・明山正実と、同じく放射線技師・森川 朋である。馬場記念病院の1階ロビーに集まった女性を前に、やや緊張した面持ちで森川は話を始めた。「皆さん、日本では乳ガンの検診率がどれく



ガンの罹患率・死亡率は上昇傾向にあります」。

明山は語る。「当院では2006年からマンモグラフィーを行っていますが、中には『乳房をはさむのがすごく痛い』と聞いただけで…』と不安を訴える人がおられます。そうした不安を取り除き、リラックスして受診していただけるよう検査前にコミュニケーションをしっかりとるようにしています。私たちは、もっと多くの人に検診を受けていただきたいと思い、正しい知識と情報を伝えなければ、と考えました」。

ひと通りの講義が終わり、質問がないか聞いてみると、ひとりの女性が手をあげた。その女性は「質問とは違いますが、報告したいことがあって」と前置きしてからこう話した。「実は以前、ここで検

査を受けて乳ガンとわかり、手術を受けたんです。おかげで今は元気に過ごしています。ありがとうございます」。

この勇気ある発言は明山、森川にとって何よりも喜びであると同時に、会場の人々の心にも強く印象に残った。セミナー終了後、検診の申し込みが着実に増えたという。「今回作成したスライドを利用して、もっといろんな場所でお話ししていこうと考えています」。明山は、そんなふうに今後の展望を語る。



常駐スタッフがいる 医療情報コーナー！

以前から継続している活動だけでなく、新しい取り組みも生まれている。例えば、平成19年8月、馬場記念病院の1階ロビーの奥に、「医療情報コーナー」が新設された。可動式本棚には、医療に関わる書籍140冊。そのほか、食事療法や難病相談窓口などの資料も置いてある。さらに特徴的なのは、案内役のスタッフが常駐していることだろう。その狙いについて、田中に聞いてみた。「患者さまやご家族が相談できる院内の窓口を一つで



も増やしたかったこと。それが根幹にあると思います。だから、スタッフを常駐することにしました」。

医療情報コーナーの開設に尽力した地域医療支援室の課長代理・原田佳子は、抱負を語る。「スタッフが常駐することで、病院の機能を上手に利用するお手伝いをしたんです。例えば、食事療法について詳しく知りたいければ、管理栄養士へ。介護のことなら医療福祉相談員に相談できるよう手配します。いわば、病院機能をフルに活用してもらうへ情報の入り口として、患者さまとご家族の『知り

たい』を個別にサポートしていこうと考えています」。

患者さまやご家族の反響も上々だ。本の貸し出しでは食事療法の本に人気が集まり、急いで増やしたという。「ふらりと立ち寄る方も多く、資料が早くなくなるので驚いています」と原田は笑みを浮かべる。

患者さまの視点で 自分たちを見つめ直す。

次々と広がっていく勉強会や情報提供の仕組みづくり。そのモチベーションはどこから来るのだから

う。「やはり、私自身や職員たちが患者さまの立場に立ったとき、どういう医療・介護サービスを受けたいか、ということですね。その視点で自分たちを見直すと、課題や改善ポイントが見えてくるんです。課題がたくさんありすぎるんですけどね」と田中は苦笑する。医療は日々進歩し、環境変化も激しい。「私たち自身も勉強していかなくてはならないし、地域の方々に知ってもらい、一緒に考えてほしいこともどんどん増えていくでしょう」。田中は地域医療を包含する視点で、これからも情報発信や啓発活動を強力に推進しているとしている。



「馬場記念病院の地域教育を語る」

患者さま中心の医療を実践するために。
いつでも病院へ「学び」に
来ていただけるように。

馬場記念病院 院長（医療法人ベガサス理事長）

馬場 武彦

患者さまを中心に、
専門性を生かして
タッグを組む。

地域医療支援病院に求められる機能として、地域医療の第一線を担う診療所への情報提供や教育支援がある。馬場記念病院は、地域医療支援病院の承認を受ける以前から、診療所の先生方と一緒に勉強

し、情報の共有に努めてきた。先に紹介した馬場記念病院勉強会などである。それは「地域完結型医療の枠組みのなかで、地域医療の質を高めるためには、診療所の先生方と一緒に学ぶことが必要不可欠だからです」と、院長の馬場武彦は言う。

「しかし、地域医療支援病院ならそれは当たり前の活動です。それよりも、冒頭で紹介した、診療所で撮影されたX線フィルムの読影を依頼される放射線科のケース。

正直、私はうれしいですね。なぜなら、一般的に医師同士が教え合うのは当然の行為なのに、わざわざ診療所の先生が当院に足を運び、交流を深めてくださっていることがうれしいのです。これは当院に常勤放射線専門医がいて、きちんと病診連携しているからこそできることだと思います。診療所の先生と当院の専門医が、医療資源を無駄にすることなく、双方の機能や役割を最大限に生かしてタッグを組み、一人の患者さまに適切な医療を提供するという、本当の意味での患者さまを中心にした地域医療を実践しているといえます。今後は、こうした活動をもっと広げていきたいですね。」

毎日が医療体験デイ。 よりオープンな病院へ。

一方、一般の人々への情報発信・啓発活動を、馬場はどう捉えているのだろうか。その代表例であるベガサス医療体験デイの各体験コースを、馬場は丹念に見てまわり、参加者の反応を確かめている。「どれも参加者の皆さんには喜んでいただけたようです。職員が手づくりで準備し、地域の方々に近い

目線で伝えているところがいいのではないのでしょうか。しかし…」と馬場は続ける。「大きく角度を変えて考えると、一年に一度の医療体験デイではとても足りない。地域の方々が、イベントだからではなく、日常的に病院を訪れ、医療をもっと身近に感じていただく、学んでいただくくらいの考え方を視野に入れていくことが、これからは必要かと思いますね。」

日常的に病院を訪れるとは、どんなイメージか。馬場が抱く考えの一部はこうだ。「院内で、健康や医療について知識を深める教室を開くこともできます。希望者がいれば、毎日、病院見学を実施してもいいでしょう」。それはいわば、毎日が医療体験デイということ。より開かれた病院として、地域の方々にいつでもお迎えすることを意味する。

さらに馬場は言葉を重ねる。「医療従事者、一般の方々を問わず、『支援』を行うには積み重ねが大切です。少しでもいいから前へ進む、そうした私たちの姿勢が、地域医療の向上に役立つのだと思います。これから、法人の職員全員が、その認識を持ち続けていくことが何より大切だと考えています」。

Pegasus Tsubasa

special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と、連携を行っています。診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。special 2 では、こうした診療所、事業所をご紹介します。

※ 診療所 (アイウエオ順) そして事業所の順でご紹介しています。

患

者さまが医師の顔色をうかがいながら
病状を訴える。そんな診療所ではない。

診療所

医師としての存在価値を
求め続けて。

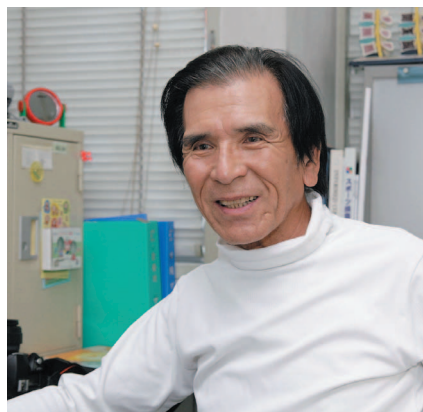
● 外科医として学んだ
知識と技術を活かし、
地域医療に貢献する。

岡本源八院長は昭和35年に大阪市立大学医学部を卒業し、同大学の第2外科で、外科医としての技術と知識を研鑽した。その後、大阪市立大学大学院に進み、卒業後は学生の指導や外科医としての手腕を救急病院で発揮した。そして昭和48年、堺市に岡本外科を開業する。「一つの専門を極めることも大事ですが、私は医者として、さまざま患者さまと触れ合うことができる地域医療の道を選びました。医者は常に患者さまと身近に接していなければいけないと思ったのです」。

院長が外科医を志したのは、ガンを治したいという抑えきれない情熱があったからだ。当時、外科治療はガンを根治できる唯一の治療法だった。「どんなガンでも絶対に治してやるという意気込みがありました。でも、実際やってみるとそんな簡単なものじゃなかった。今にして思うと若気の至りでしたね」。

● 医学は深淵たる学問。
学んでも学んでも
終わりはしない。

現在72歳になる院長はとにかく精力的だ。地域医療に携わる医師として、休診日は地域医療機関の勉強会に参加し、医学全般にわたる知識を貪欲に吸収している。「馬場記念病院 放射線科





岡本外科

院長：岡本 源八

住所：堺市中区大野芝町139-4

TEL：072-235-0180

診療科：外科、整形外科、皮膚科、胃腸科、放射線科、リハビリテーション科

部長の山田先生に難しい症例の読影を教えてもらったことが患者さまの命を救いました。それによって患者さまに素早く適切な専門病院を紹介することができたのです。院長が勉強会に積極的に参加するのにはもう一つ理由がある。それぞれの病院の得意領域を知ることによって患者さまの症状に合った病院を的確に紹介することができるからだ。

このような院長の姿勢は、これから医師を志す若者にとって多に参考となるに違いない。実際、岡本外科は大阪市立大学医学部臨床実習施設に指定され、年に数回、学生が医師としての本分を院長から汲み取っている。

そんな院長は普段から白衣を着ることがない。それは患者さまに医師という権威を感じてほしくないからだ。「患者さまが医師の顔を伺いながら病状を訴えるような診療環境はいけません。子供はアメを貰いにくる感覚でここに来ますね」。院長は頬を緩ませ、

白い歯をこぼした。

通常、外来は12時までだが、午後1時を過ぎても診察がなかなか終わらないこともある。岡本外科が地域に深く

患

者さまの病気だけではなく、心も診ることで安心して医療が受けられる環境をつくる。

診療所

より地域に密着し、地域住民の方々が必要とする医療を提供する。

● 患者さまから信頼と安心を得るために。

「私はそれまで患者さまの病気だけを診ていたのです。池上雅久院長はそう過去を振り返った。昭和23年に父親が開業した診療所を継いだのが、今から5年前のことである。その前は市立大津病院や市立堺病院の泌尿器科の専門医として勤務していた。「あの頃は、単に患者さまの病気だけを診ていたような気がします。開業医になって、それではいけないと感じました。患者さまを、ただ病気を抱えた人としてではなく、その人を一個人として診なければならぬ。診察では病気のことでだけではなく、生活に密着した話もしていますね」。患者さまとの冗談を交えた会話が、患者さまの緊張を解し、病気への不安を

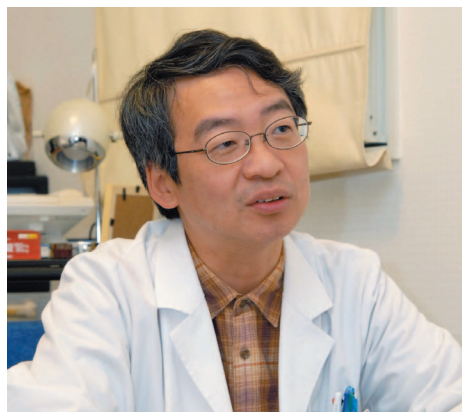
根を下ろし、住民にとってなくてはならない診療所として位置付けられている証拠である。72歳になる院長の引退はまだ先のようだ。

消し去ってくれる。このように、池上医院には1日に約70人もの患者さまが訪れ、院長と「会話」をし、安心して治療を受けている。

院長の1日はとにかく忙しい。午前診を終えた後は、午後3時ごろまで往診に出掛ける。午後3時から午後5時まで検査や小手術を行い、午後5時から再び外来診察を行う。「3年前から在宅医療も始めました。今では一人で約20人の患者さまを往診しています」。さらに、院長は空いた時間を利用して、殿馬場中学の校医や堺看護学校の講師も務めている。「一年で休めるのはお盆と正月の数日間ですね」と院長は頬を緩めた。

● 患者さまが、そして地域住民の方々が常に求める医療を提供する。

「あなたはどこも悪くはない。これは医師として、患者さまに絶対に言っていない言葉です」。患者さまは困っているから病院に来る。だから患者さまが「どこも悪くない」



ことはあり得ない。「困っている患者さまに、どこも悪くはないと言うのは医師としての怠慢ですね」。実際、院長は、大手の病院で、どこにも異状が見つからないと言われた患者さまを診察し、治療した経験が数多くあるという。「患者さまの小さな訴えでも、その原因を見付けるのが医師としての大事な仕事です。心のケアを含めた診療を心掛けていますね」。さらに院長は、患者さまや地域住民の方々の要望に少しでも応えようと努めている。「デイケアを行うなど、介護分野を充実させたいと考えています。より地域に密着した医療を提供したいのです」。院長は熱く語った。それを実現させるには、地域医療機関の協力が必須だ。院長は、さまざま勉強会に参加するなどして、各医療機関との連携を密にしている。「特に

馬場記念病院には在宅医療に協力していただき大変助かっています。それに栄養士の方を月に2回派遣していただき栄養指導もお願いしています。私一人では限界がありますが、こうして地域の病院と連携することで、患者さまにより良い医療を提供することができるとです。院長は、患者さまが今一番何を必要としているのかを常に考え、日々の診療に努めている。

地

域の方々に愛され、地域交流の場として多くの人が訪れる施設をめざす。

事業所

入居者の方々が、毎日笑顔で過ごせる「家」づくりをしています。

●入居者が「自由」に生活できる家をめざして。

自由とは、「自分の意のままに振る舞うことができる」ということ。

特別養護老人ホーム「故郷の家」では、入居者の方々が「自由」に過ごしている。「施設は、鉄格子のない監獄になってはいけない。自分はそのような施設に入りたくない」という「故郷の家」を設立した、尹基（ユンキ）理事長の考えから、「お年寄りの方々に自由に過ごしていただける施設を」という理念を掲げ、「故郷の家」



池上医院

院長：池上 雅久

住所：堺市堺区住吉橋町1-5-3

TEL：072-232-1702

診療科：泌尿器科、皮膚科、性病科、内科、整体



を運営してきた。施設長である田内文枝は昔を懐かしむように語った。「入居者の方々に自由に好きなことをしていただくのは良いことですけど、万が一の事故を考えると非常に恐いことでもあります。しかし、その懸念は杞憂だった。ある入居者の方が、毎日出掛けては立ち飲みのお酒を飲んで来られました。ふらっと出掛けられるので、もし、途中で何かあつてはと、私たちは常に神経を使っていなければなりません。しかし、入居者の方々が、そのお年寄りを私たちの代わりに見守ってくれるようになったのです。この主は自分たちだという自覚を持ってくださったのが嬉しかったですね。『故郷の家』は訪れるすべての人々に微笑みがこぼれるほど、あたたかく自由な雰囲気になりあふれている。

●地域の方々が気軽に足を運んでいただける施設でありたい。

「故郷の家」は、在日コリアンのお年寄りが、自国の郷愁を感じながら、韓国人らしく、日本の高齢者とともに健やかに余生を送ることができると施設だ。

施設長は、「故郷の家」が特別養護老人ホームとしてだけでなく、地域交流、文化交流の場所になって欲しいと切望する。「地域の方々が気軽に遊びに来てくださり、気軽に話してお話していただける場所にしたいですね。入居者と地域の方々と職員が、何でも気軽に話すことができる、家族のような密な関係。そういう『家』にしていきたいと思っています。」

社団福祉法人
こころの家族
特別養護老人
ホーム
故郷の家



施設長：田内 文枝

住所：堺市南区松尾3360-12

TEL：072-271-0881

事業内容：特別養護老人ホーム、短期入所生活介護、通所介護ケアプランセンター、在宅介護センター、ヘルパー派遣事業、養成研修事業

馬場記念病院とはパートナー事業所として、施設長が理想とする密接な関係を結んでいる。「外来受診の送迎をしてくれるのは馬場記念病院しかなかった。急な依頼にも臨機応変に素早く対応していただき、本当に助かっています。施設長は頭を下げながら感謝の言葉を述べた。そして地域の方々への感謝も忘れてはいない。「この『故郷の家』は、地域の方々の支えがあつてこそ運営できる施設だと思っています。この庭は地域のボランティアの方々が入れしてくれています。本当に感謝しています。見てください。施設長が示した手の先には、美しい花々が咲く色彩豊かな庭のなかで、談笑するお年寄りの幸せな姿が見えた。

Pegasus Tsubasa

医療が変わります。 ペガサスも変わります。

地域医療を取り巻く環境は、変わり続けています。

その変化を見つめて、ペガサスでは、

馬場記念病院を中心に、さまざまな取り組みを行っています。

その取り組みの目的や方向性、

また、皆さまにご理解いただきたい点をお伝えします。



馬場記念病院 初期研修医が クリーブランド研修に 参加しました。

「臨床研修指定病院」である馬場記念病院では、研修医教育の一環として、管理型臨床研修の初期においては2週間、初期臨床研修を終え後期臨床研修で専門技量を身につける医師には1カ月間、米国クリーブランドにあるクリニックでの研修機会を設けています。その第一期生として、

10月3日から17日までの2週間にわたり、馬場記念病院 初期研修医である田中稔之医師と甲斐沼成医師がクリーブランド研修に参加しました。

帰国後、院内で開催した報告会では、

看護師による脊椎・硬膜外麻酔や、

救急医療におけるチェック項目に記入するだけのカルテなど、日本と米国の医療の違いなどを両名が報告し、

職員から多くの質疑がありました。

こうして、米国で体験した生きた情報を職員に提供することは、患者

報を職員に提供することは、患者



さにより良い医療を提供するための議論を提起し、職員教育の活性化に繋がることとなります。また、若い研修医が、日本と米国の医療の違いを経験することは、今後の日本医療の在り方を客観的に見つめる眼を養い、新たな時代を背負うに相応しい医師として必要なことだと考えています。

当院では、今後も医師の教育に力を注ぎ、患者さまにとって必要な医療を提供できる医師を育てていきたいと思いたいと思います。

また、

「日本DPPC協議会」大阪事務局としてDPPCの積極的な情報提言をしています。

※ DPPC

Diagnosis (診断)、Procedure (手順)、Combination (組み合わせ) の略で、一連の診療行為をひとまとめにして支払う「診断群別包括支払い制度」のこと。

DPPCは全国共通で、医療のモノサシとなり、医療の質を明確に評価することが可能のため、

より良い医療の提供体制構築に役立っています。

9月22日(土)、「日本DPPC協議会」主催の、第4回DPPCセミナーが新梅田研修センターにて開催されました。当日は西日本各地より138人の方々が参加され、積極的な意見交換が行われました。

「日本DPPC協議会」は、国やDPPC実施病院同士が、DPPCの情報交換を行い、有用な情報を医療機関に提供するための活動を行っています。

当院では、こうした活動のなかで、急性期病院の立場からDPPC実施の現状を提言しています。また、「日本DPPC協議会」大阪事務局として、セミナーなどで提議された意見をまとめ、厚生労働省へ申請するなど、大阪地区での「日本DPPC協議会」の中心的な役割を担っています。

当院では、今後も医療情勢を視野に入れたDPPCの有用な情報交換を積極的にに行い、DPPC実施のより良い仕組みづくりのための情報提言に努めてまいります。

地域医療を考えるペガサス情報誌



2008年冬号
平成20年1月発行第7巻第3号(通巻27号)

発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
編集協力 HIPコーポレーション
発行 医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>
本誌は再生紙を使用しています。

special
1

人を育て、人とともに、
地域医療の明日を創る。
第3弾 — きめ細かな地域支援・教育 —

special
2

医療から、そして看護、介護から。
地域社会を支える人々。

※記事の制作にあたり、患者さまや診療所の先生方、事業所の方々にご協力いただき、心から御礼申し上げます。

BHI賞グランプリ獲得

表紙のBHIマークは、ペガサス情報誌『つばさ』(22~25号)が、第7回ヘルスケア情報誌コンクール(BHI賞)においてグランプリを獲得し、主催者であるNPO法人日本HIS研究センターから贈呈されたものです。

つなぐ

地域医療の向上とひとくちに言っても、それには医療人一人ひとりの、たゆまぬ努力の積み重ねが必要です。ただ、それを前提としながらも、個人の努力だけに委ねるのではなく、その個人の努力を、どう組織の仕組みとするか。そして、組織の仕組みを、どう地域に広げるか。さらに、それをどう継続させるか。この繰り返しは何より大切です。

地域医療支援病院の馬場記念病院を核とするペガサスでは、地域医療向上のために、地域に広げた仕組みを、日々、少しでも改善させること、そして、継続させるための環境づくりを、自らの使命と考えています。そのためには、地域の医療・介護・福祉関係の方々と、コミュニケーションを密にし、地域社会全体の声をお聞きすることに努めています。

地域の医療・介護・福祉関係の方々とのこうした共同作業が、地域医療の向上に結びつき、結果、地域の皆さまお一人一人の安心につながることを信じ、これからも全力を注いでいきます。

医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦



医療法人

ペガサス